

奈良よ

第一信

奈良に来て二日目の十一月六日、その暖かさはシャツや外套の冬支度が恥かしいやうである。黄いろい光りに包まれた南都の秋を、自分分はこれから何う受取るであらうか。

正倉院寶物の曝涼はこの十日頃までだといふ。もつとも之れは平民には見られないものである。それを無位無官の自分等が拜觀させて貰ひたいといふのだから、むづかしいのは當然である。けれども自分の専門學は美術に關したものであるし一方には例の文藝委員會などいふものもあるのだから、何とかしたら見られまいものでもない。そこで早速文部省へも御助勢を頼んで、願書を出して見た。そして奈良へ来てその返事待つてゐると、やつぱりいけなしいふ。少々ぬげの氣味である。日本といふ國では、雲上からさす直接の光榮はとこしなへに、平民の上を照さない仕掛に出来てゐる。しかたがない。行つて春日野の鹿に餌でも買つ

てやつて、羞かしさうな眼をする額でも撫でてやう。

と思つてゐるうちに天氣模様が變りかけて来た。少くも四五日はゆつくりと此の土地に親しんで見ようと思つたのが、何だか荒んだ氣持になつて来る。今の自分には、一つところ長く留つてゐられるかどうか問題である。二三日したら京都邊へでも行かう。或は二十年ぶりに故郷の石州へでも這入つて見ようか。體がちつとしてゐれば頭が働く。西へ東へと休むひまのないほど飄泊してゐたら却つて心がやすまなかも知れない。受働的でも痛烈な刺戟を絶えず神經に受けてゐたい。それには奈良はあまりに穏和である、鈍角である。懐古の情味それみづから、自分には昔ほどの濃やかな心持を齎さない。十年以前、はじめて一度この地を訪うた時は、あの猿澤の池の邊まで來ると、何とは知らず感謝の涙が眼頭ににじんだのをおぼえてゐる。自分の心が荒んだのか、あの時のナイーヴな情味を今いちど呼び返すことが出

第二信

來るだらうか。少くともこゝ二三日は此の土地に居て見よう。十時、この原稿をポストに入れてながら、兩の覺悟をして出かける。

自分は奈良の契點を嫩草山に置いて見る。此の山の氣分が奈良のシムボルである。此の土地で最も氣に入つたものは此の山である。二月堂、三月堂の邊に小半目を過して、春日神社の方へ抜けようとする、すぐ左手に明るく眼をあたいたやうな嫩草山が坐つてゐる。右は春日山、左は手向山、いづれも魁脊とした中に燃えるやうな紅葉の錦をかけてゐる。其のあひだに挾まつて、此の山一つが肌を脱いだやうに柔かである。山といふよりも丘である。かけ上ればすぐ頂に達せられさうに見える。圓みを持つた輪郭をのび／＼と西南にひろげて、其の裾が自分の今通つてゐる道である。曇つてゐた空がちやうど此のころから晴れて來て、小春日の暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。中腹に殊さらしく松の大木が三四本立つてゐる外、立木といふものは一本もない。秋草の黄いろに枯れたのが、しなやかな毛織物のやうに全山を蔽うてゐる。その勾配のなだらか

な、廣々とした裾野には鹿が遊んでゐる、掛茶屋がある、白い手拭を姉さまかぶりにして手甲をかけた草の根搔の女がある。時たまに茶屋の女が客を呼ぶ聲の外物音一つも聞えない。掛茶屋に腰をおろしてうつとりしてゐると、いつの間にか、うつら／＼と眠くなるやうな気分である。鹿は雌鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方へ向け、まぶしきうに眼を細めて、口をもぐ／＼させてゐる。立つてゐるのは其の涙ぐんだ大きな黒い柔和な眼をちつとさせて、物を考へるでもなく考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでも逃げないでもないといふ態度で寄つて来る。一皿二錢の餌を一つ／＼つまんで口に含ませてやると、しまひにはみんな懐いて来る。前の一定にやつてゐると、右の奴は外套の袖を喰へて引つばる。後の奴は桶を喰へて引つばる、自分等にも呉れといふ催促である。兎鹿は遠慮して離れてゐる。雌鹿も其のいかめしい角の手前、すまして後の方にゐる。やはり人なつこいのは雌鹿である。と思つてゐると、あとの方にゐた一定の雄鹿が自分等の方へ餌の廻つて来ないので、憤つたと見えて、其の角の生際の邊を振り立

て、傍にゐた雌鹿の横腹をどんと突き倒した。今まで静であつた一群が忽ち動搖しはじめ。併し騒ぎはそれだけで、また元の平和に戻つてしまつたが、穏やかな彼等の世界にも、波瀾があるのである。

茶屋の女が出した木熟しの柿の甘いのを一つ二つ割いて食ふ。鹿が前へ来てしきりにお辭儀をしてゐる。皮やへたを投げてやると、みな喰つて了ふ。

山は一面に黄色な芝草を地として、卓である草に薄がある、草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする軽やかな穂を出して、かすかな風に揺れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のやうに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戦つてゐるのが無残である。

しばらく、草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の美女の尼が、裏絹の袈裟ころもを着て端坐した心持である。

第三信

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣し

て立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは此の邊である。興福寺の五重塔は、偉観には相違ないが人家に接しすぎてゐる。東大寺金堂の大佛殿は大きいのは大きい、唯の寺構である。ひとり二月堂三月堂四月堂等の一群が、かけ離れて周圍との調和に特殊の意味を現はしてゐる。中でも三月堂が其の意味の中心を代表してゐる。眞に千年以上の古堂院に接するときの畏れと静寂と神祕とは、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造営にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之に隣つて、半ば山に據り雄大の構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等に取つては、現在の榮と生との如何に殺風景にして、寂と死との如何に高貴なることよ。二月堂の觀音は今も諸人の信仰厚く、石段の兩側に立ち竝んだ夜燈の寄進者は多く藝妓である。本堂で御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度も踏む。お水取りの儀式もある。要するに眼を歩いて生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍の平地に立つた儼千年の月

はすべて鎮されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ来て観る寺は、斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を絞どつた背景や翼景に圍まれて白く打ち開いた寺地には、折しもの薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。屋根瓦の苔、金物の錆、柱の朱の剥げの淋しさ、軒裏の胡粉は後朝に残る女の頸白粉のやう。木材の朽ち黒み細つた木地の荒れ。薄暗い光りの落ち込む堂内には、大香爐の上に積る埃が冷たさである。そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてゐると寂寞の氣が人を襲つて来る。二月堂との間に落ちる水の音も次第に消えて行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろがつて来る。千餘年の昔こんな大建築のプランを細かい一線一畫の末までも頭の中に描いた、其人の頭と今の吾々の頭との働き工合など比べて考へて見る。斯うした茫然としてゐる十餘分間は貴い時間であつた。其内後の山で、手斧を擔いだ男と商人風の男とが、大きな立木を距つて調子はづれの聲で、「五十錢や。三貫にしなければ。飽かん。買ほか」といふやうな會話をはじめた。其の響が木だまを返してゐる。

第四信

奈良ももう見飽きたやうである。大佛の前は何度通つたか知れないが、昨日まで這入つて見る氣になれなかつた。あの境内は門の前から見るのが一番いい、本堂の前に来て見るのが其次にい、中へ這入つて見るのが一番つまらない。それもたつた一人、陰影のやうな堂内の空氣の中で、あの時代の巨大趣味と妄想趣味との結合した怪物とも見るべき此の巨像のまはりを徘徊してゐたら、そこに特殊の心持も味へるであらうが、今は修繕中である。掛橋を上つて行つて、雑沓の中を正面から拜んで来たものでは愈々つまらぬ。此のほか塔にはたしかに面白いのがある。佛寺の塔はちやうどヨーロッパ中世のゴシック寺院の尖塔と同じく、人間が天に向つて高まらんとする心を現はしてゐる。古佛寺の一面の趣味たる静寂、死滅に對しては、むしろそれを裏切り、若しくはそれ以上を示してゐる氣味がある。之れに對して奈良最古の建築の一と言はれる唐招提寺金堂の全景のゴシック・ポーションは何といふ静寂であらう。多くの寺院の屋根の如くむやみと上に向つて延びないでしつとりと下に落ちついて、心安らかに棟を横へ、軒を

伸べた感じは、静止そのものである、安定そのものである。たゞ修繕したらしい瓦の色を生々しいのが僅に趣味の調和を破つてゐる。唐招提寺と一緒に見たうちには、業平、菅家、横笛などのローマンスに當んだ舊蹟もあつたが、舊都大極殿の跡が一番心を惹いた。高田學長も來合はされ、久しく土地に在る岡本社長、高田敦諭などが同道して案内して呉れられる。お蔭で地理的變遷などもよく分つた。昔の宮城から眞正面朱雀大路を下つた邊は、今の奈良の町から外れてゐたといふ。大極殿を中心にした宮城址は一面に打ち開いた野原の中に点在してゐる。二三尺も土の盛り上つたままに、芝草、小笹、其の他の雜草の茂みが枯れ残つて、野菊、提灯草などの黄や紫の小さな花が秋の日を受け、つましやかに咲いてゐる。諸方の門や廻廊の跡は小さな土饅頭に過ぎないが、大極殿跡は廣い長方形の土臺である。その上に立つて、底寒い秋の風に吹かれながら昔の事を想像して見ると、型の通りの懐古の情が起る。奈良朝式の風俗をした大宮人の洒落者等が、リファインされた綺麗な顔立の中に、どこか刺戟と隠忍の影を藏して、併しまだ平安の子

女程には神線が細らないで、そこらをつぶら／＼してゐたらうと思はれる。そこが今はもう田の稲も大かた刈取られて、秋もさん／＼に老けたといふ風情である。土地の言ひ傳へによると、古來此の地點に鐵を入れると屹度疫病にかゝるといふので、周圍は残らず田になつて以來千餘年であるに拘らず、此の地點だけ農夫の破壊力から遁れて保存せられたといふ。よくある例であるが、ちやうど蟲類が毒粉やそれに連想するやうな色を身につけて、自己保存をやるのと同じ自然の保存法である。此等の地域が迷信の宗教的威力を借りて自己の逆保護色としたのである。少くとも十九世紀以前の歴史にあつては、文明の最も永久な保存者は宗教力であつた例が、此地盤の上になで見られるのである。けれどもマツスの中にすら斯うした宗教的威力の漸く消えて行く今後は、何が最も強い永久力になるのであらうか。

斯んな事を書き出しては果しがたない。奈良の事はこゝに止めて、少しく速出をして見る。

第五信

今日は誠儉、多武峯、三輪、長谷寺を見るために同じく高田長と岡本氏と三人で出かけ、

時間の都合で三輪だけを省いて、順に初瀬の長谷寺まで来た時は、薄暮である。長い／＼廻廊形の屋根で蔽うた急勾配の石段を登つて行く、洞瀬山の山腹に據つた本堂及び舞臺の構へがまづ観音だといふ輪郭を與へる。元來數ある御佛のうちでは、観音が最も凡夫に親しい佛である。従つてまた最も繁榮するのも観音である。俗といへば俗だが、そこに人情の味の豊かな所がうれしい。迷信も願がけも、誠できへれば黙つて聽いて下さる。温い血の通つた佛といふ感じがする。その観音の寺院では、淺草の淺草寺や信州の善光寺のやうに雑沓の巷に降りて來てゐるのと、京都の清水やこの長谷寺のやうな、山の中腹に舞臺を構へたのと二通りあるやうである。そして同じく山に臨んで舞臺を構へた中では、清水は華手で長谷寺はぢみである。ぢみなだけに大和の山中に立つた觀音堂として、蒼古なところがよく纏つた氣分を持つてゐる。舞臺の上から見おろすと、下の谷合からかけて初瀬の旅籠屋町の屋根はもう夕暮の霧で黒ずんでゐるが、左右に迫つた山の側面は、今が紅葉の眞盛りである。峯を越して僅に残つてゐた夕日が見てゐるうちに消えて行く。欄干によつてしばらく無言のまゝに見送つてゐ

たものが、溜息をして向き直ると、本堂の暗い中にはもう燈明が上つてゐる。本尊を拜した後こゝの管長某氏は早稲田の校友であるといふので、名刺を残して山を下つた。長谷寺と清水とは、恐らく此の式の観音の雙壁であらう。それを寫したといふ鎌倉の長谷と上野の清水とおもちや式たるは言ふまでもない。長谷寺へ行く前に廻つたのが多武峯の談山神社である。之れは關西の日光だと謂ふ。日光ほどの華麗豊富はないが、徳川氏の廟社に對する藤原氏の廟社といふ比較の興味がある。高山の奥にこれ程の壯麗な殿社を構へたのは、關西第一の名に背かないものであらう。日光ほど燦爛としてはゐないが、其の代り何處か上品な貴族的な落つきを見せてゐる。傍らに十三層塔の見事なものがあつた。所謂檜皮葺の厚い屋根が十三重に疊つてゐる角度と直線の調子が特殊の印象をおしつける。之れが我が邦に於ける此の種の塔の魁であるといふ。また此の社の奥に鎌足の墓があつて、事變のあるたびに破裂するといふので、御破裂山といふ、珍しい名前である。社殿までの山道、兩側すべて二三百年を経た大杉や大楠の立派なのが日も透さないほどに競ひ立つて、此の神社の威嚴を守つてゐる。鬼も

角も日本の文明に第一回の澤布巾をかけて之れを美しいものにして呉れた藤原氏の祖先が、斯うして靜に此の山の奥に鎮まつてゐるのだと思へば、感謝の念が湧かぬでもない。西洋ではマースよりもヴェキナスの力で政權を張つたのが一頃のオーストリアだといふが、日本では藤原氏がちやうどそれである、當時の美人は凡て藤原氏の出であつたのだから堪らない、といふやうな高田學長の話を聞きながら山を出た。

第六信

畝傍の神武陵及び樞原神宮は、歴史の上から言へば名所舊蹟の中でも日本第一に位すべきものであるが、其の割には道路等の設備も、所在地の構へも行届いてゐない。あらゆる意味に於いてもつと壯大であつてよい譯だ、日本に於ける神話と歴史との分割線はこゝである。古代にあつては、交通といふことよりも、先づ其の反對に阻隔的な地形が自家を衛るに便宜と考へられたであらう。従つて外との交通路となるべき海港などといふ觀念は國都を選ぶ上にまじたる要素とはならなかつた。寧ろ自然の大城壁を周らしたやうな山脈が三方を取り圍んで、一方に打ち開いた口がある、其の口は成るべく

南面して日光の豊かな所であつて欲しい。斯やうな條件に合ふものとして大和の山間の平地はおのづから古代の人の好みに適したらうと察せられる。勿論この好みたゞ一つが定都の條件であつたか否かは別問題であるが、少くとも之れが上代人の居都を下すサイコロジに最も重大な一作用をなしてゐたことは想像せられる。而して此の好みの最も完全に大規模に現はれたのが大和では奈良の平野、山城では平安の平野であつた。彼等が先づ奈良に明白に其最大理想的居城を認めるまでは、其附近の山間に、其時代の程度に應じて比較的規模の平野を見つけ、そこを彼れからはと移つてゐた。其最初のものが即ち神武帝の畝傍附近である。

今の畝傍驛から樞原の帝都跡までは車を走らせる。途に飛鳥川を淺る。淵瀬常無しと詠ぜられた此の川も、此の邊は川幅二間にも足りない溝のやうな川である。細砂の川牀で、少しばかりの水が白ちやけてゐて、一向に歌の響に引かれさうにもない。それよりも此の邊の興味はやはり畝傍山を中心とした地勢の上にある。見わたすと遙に生駒、金剛、葛城の諸山脈が、一瞬間もちつとして居ないやうな其の不安規則の輪郭に高く青空を限つてゐる。其の中の平

野の一部にすぐ手近の畝傍、耳成、天香山の三山が鼎立して、さも人間と親しみ易い様子をしてゐる。吾等の祖先が何ゆゑに山と特別な親しみを持つてゐたかは別として、彼等は朝夕此の愛らしい小山や彼の天空を限つて近づき難い大山脈やを仰ぎ見、めぐり見して、人間と自然との間に一路の感應を通じてゐたに違ひない。今日我々の硬ばつた精神や感覺には、自然は多く死んだ外形の面が觸れて来る。併し古代人の新鮮な精神や感覺には自然の生きた方面が一層赤裸々に感觸せられたであらう。神話時代に近づくと従つて、山川も段々生物に近よつて来る。神話時代の人間には、山にも川にも靈があつて、彼等と相互に感應し行動するのが常である。我々の祖先と此の邊の山ともまた其の通りであつた。其の神話の遺物の最も著しいのが三山である。

畝傍と耳成と天香山とは其の小さい愛くるしい山で、且つ箇々平野の中に孤立してゐる點が、いかにも人間に親しみ易いと共に、其山の意義は決して莊嚴とか強大とか神祕とかいふものでなく、優美な可憐な平明單純なものである。であるから此二山が神話に這入つて、彼の「耳成と女を争つた傳説となつた。すべて神

話には多く人間以上の超越力が要素となるものであるが、三山の女争ひの如きはむしろ人間的である、神話としては極めて平明單純な可憐な神話である、優しい神話、特色のある神話である。此點が面白く思ふ。殊に三山の女争ひといへば、直に近世の文藝の世界を想はせる。近代の社會悲劇の最好題目は所謂三角關係である。之をマーテルリンクで言へば、女一人に男二人の關係から生ずる『ベレアスとメリサンド』の悲劇か、さもなければ男一人に女二人の關係から生ずる『アグラヴェーンとセリセツト』の悲劇かである。常に近代のみでなく、昔に溯つても、最も痛切な人間の悲劇は常に此三角關係から生ずる。「寂しき人々」「アンナ・カレニナ」から、『小春治兵衛』『パオロとフランチェスカ』に至るまで皆三角文藝で、而も己みがない人生悲劇の根柢に突入つたものである。茲まで来れば人生はたゞ涙と嘆息の外はない。此の見地から見れば三角文藝の端緒がこの三山の神話にまで溯つてゐるのである。三山の三角關係は大様な古代の神話であるから喜劇的趣味であるが、其の同じ流れが文明の變化に従つて後世の三角悲劇(時としては三角喜劇)を成すに外ならない。此の意味から見れば、三山はなつかし

い山である。こんな事を考へながら畝傍山の麓まで来ると、流石に此の山は三山の中でも最も威容に富んでゐる。東北(?)から見ればやゝ笠を伏せたやうな形になる、其の下が神武帝の御陵である。西南側は脚の開いた机を傾けて据ゑた形で、其下に檜原の宮がある、畝傍山には若い赤松などが茂つてゐて、要するに美しい山である。昔ほどどんな木が茂つてゐたか知らないが、此の山を目標にして神武帝が其の宮城地を下し給うたのは所以あることであらう。耳成山は小さく端麗である。天香山の形にはそれ程の特色が無いやうである。其の後の事どもを書きつける。

故梁川君の柩に捧ぐる辭

謹みて綱島榮一郎君の靈に告ぐ。君が生前の知友等茲に相會して、君の亡軀を送らんとす。生等同人また柩に侍して君の傍にあり、

り、しばらく最後の別れを惜しましめ給へ。此の日たまゝ、浙瀝の雨そゝいで止まず、死に行く人を思ふの淋しき、そゝろに切なるを覺ゆ。

理情矛盾の間に齟齬たるの生等は、今に於いて、君が晩年の安立を羨む。君が世に遺せし感想に對しては、長へに批議するものと讚美するものとを絶たざるべし。君の精神は斯くの如くして不滅なるを得ん。

君はまた十年病牀にありて、慈母の愛、舊師の恩弟妹の情味をつぶさに嘗めたり。三十六年の短生涯も、君に於いて遺憾なかるべし。

君の友人等は、君が遺業を集めて、散逸せしめざるべしと信ず。

君の弟妹みな君と孝慈の質を同じくせらる。加ふるに一世の君が死を悼むこと肉身の如きもの多し。君の身後は憂ふるに足らざるべし。

生等こゝに君と永久の別れを惜しむ。是れより更に君の遺骸を送りて、大地に還さんとす。幽明世を隔つるの人、こひねがはくは安らかに眠り給へ。